

7 J I S 人材開発株式会社

(1) 日 時 2023年11月18日(土)9時30分～11時00分

(2) 調査事項 当該企業はベトナム・ハノイに本社を置く、人材開発、日本語教育を行う会社であり、同社が運営する日本語学校が、本県の外国人介護人材確保のための千葉県留学生受入プログラムに参加していることから、その取組状況等を調査・検証し、本県の介護人材の確保促進に資する。

(3) 経 過

初めに、J I S 人材開発株式会社のホアン ミン ディエウ社長から歓迎の挨拶があり、その後、竹内副団長が調査協力に対するお礼の挨拶を行った。続いて、同社ゴック副社長から学校及び事業の取組状況についての説明があり、質疑応答を行った。

その後、在学生との意見交換を行い、校内を視察した。



ホアン ミン ディエウ社長による挨拶

(4) 調査概要

【会社概要】

○会社名：J I S 人材開発会部株式会社

設立：2017年3月

代表：ホアン ミン ディエウ

社員：70名(うち日本人2名)

学生：約300名

事業：高度人材紹介、一般及び介護留学生、技能実習生の送り出し
日本語教育

- こちらの本校は公衆衛生大学の4、5階のフロア半分を借りている。
 - 全国に6つの支社があり、ホーチミン支社、ハイズオン支社、タイビン支社、ダクノン支社、最近ザライ、ダクラクにも支社ができた。
 - 弊社の強みは、他の送り出し機関は、例えば技能実習生だけ、もしくは留学生だけの派遣となるが、弊社は全労働ビザに対応できる。お客様からは人材も質が良いという評価をいただいている。
 - また、日本事業部は全員日本語対応が可能である。
 - 日本の自治体のプロジェクトにも参加しており、千葉県の介護プログラムと、鳥取市の高度人材のプロジェクトをやっている。
 - 学校視察時に紹介をするが介護のトレーニングセンターもある。
 - 方針としては、生の日本語、シンプルに話すこと、そして仕事のために学ぶこと。
- 弊社は学生を管理システムで管理しているため、簡単に学生の情報を検索し、見ることができる。



会社概要についての説明

【千葉県留学生受入プログラムの実施状況】

- 2019年4月に千葉県との協定を締結した。
- 2020年10月に1期生9名が日本に入国した。
本来であれば、2020年4月に入国予定であったが、コロナの影響で入国禁止ということで、約半年延長となった。
- 2022年4月に2期生24名、3期生26名、計50名が日本に入国した。2期生はコロナの影響で1年間入国を待っており、3期生と同じタイミングでの入国となった。
- 2023年4月に4期生28名が日本に入国した。

- 2023年9月に5期生の募集が終わり、2024年4月に日本に入国予定である。5期生は人数が多く、48名が入国予定である。
- これまでの合計は約130名である。
- 千葉県は5校の日本語学校と本プログラムに関する協定を結んでいるが、弊社の学生が全体の約8割を占めている。
- 学生の募集方法については、学区の学校でセミナーの開催、インターネットやSNSでの広報などを行っている。また、本プログラムは評判が良く、日本へ出国した学生の兄弟や友達を御紹介いただくこともあり、ある家族は3人もこのプログラムに参加している。
- 日本に入国した後も学生をサポートしており、例えば日本の日本語学校、受入会社、受入施設の訪問を行っている。
- また、日本に行ってから困っていることはないかや、仕事やアルバイトの事、学校についてなど学生にヒアリングも行っている。
- さらに、千葉県には高齢者の福祉事業支援協会があり、そちらの協会も学生をサポートしてくれている。
- 他にも介護留学生のプログラムを行っているところがあるが、千葉県は援助金も多く、気候等も良いうえに、支援協会のサポートもしっかりしているため、他県よりも学生が集まりやすい。
- 問題点もあり、1つ目は失踪している学生が2名いる。うち1名はベトナムに帰国し失踪している。もう1名は日本で失踪している。つい最近家族にも会っていろいろ調査を行っているが、今のところはまだ解決していない。来年には相談センターがベトナムに来て、また家族にも会いに行く予定である。
- 2つ目は、プログラムを離脱し大学に進学した学生が1名いる。
日本に入国後、介護はちょっと自分には合わないため、大学に進学したいということであった。
しかし、千葉県のルールではプログラムから離脱する時は、帰国しなければならないため、援助金を返済して、ベトナムに戻り、もう1回、大学に進学したということがあった。
- 3つ目は最近の問題だが、今は円安ということで、介護プログラムだけではなく、他の職種もそうであるが、日本に行く人が減っている傾向がある。日本以外の、例えば韓国やオーストラリアやドイツなどの方が収入は高くなっている。
- 日本人でも自分の国を離れ、オーストラリアで働くとか、そういう方もいるように円安の影響は出ている。

○今後もこのプログラムを継続し、より発展したいと思っている。
ベトナム人の寿命も長くなっているため、将来的にはベトナムでも介護が必要な人が増えていくことが想定されるため、このプログラムはベトナムにおける介護に関しても貢献できると思っている。

(5) 主な質疑応答

【学校への質疑】

(問) 私は介護施設を運営しているのだが、本当に働き手が不足していると、常に実感しているところであり、個人的にも、このプログラムには非常に注目している。そのような中、本プログラムに参加していただいていることを本当に有難く思っている。

御社にとって、プログラムに参加することのメリットはあるのか。

(答) メリットですが、まず1つ目は、千葉県庁のプログラムは、たくさんのお客様に対して援助金があるので、学生が日本に行くときに、ほとんど負担がない。

二つ目は、ベトナム人の寿命が長くなっており、ベトナムでもどんどん介護施設が増えてきているが、介護士がまだいない。そのため、将来的に学生がベトナムに戻ってきても、ベトナムのこれからの介護にいろいろと貢献できると思う。

3つ目は、千葉県のプロジェクトを始めた時に、自治体のプロジェクトをやっているということで知名度が上がり、たくさん大手の事業者と契約ができた。

(問) ベトナムは若い国だと思うが、これから介護人材が集まってくるというか、介護業界が盛り上がってくるということか。

(答) 実はベトナムは、若い国ではあるが、結構老人も多く寿命も長い。ハノイやホーチミンに住んでいるお金持ちの方は、親をすごく良い施設に送りたいと思っているが、ベトナムには良い施設がなく、今、日本の企業がベトナムで老人ホームを作り出している。

10年前にハノイでは、老人ホームは、多分3つか4つだけであったが、最近は何十個も増えてきた。それでも、いつも満室で、全然足りていない状況である。

そのため、ベトナムでも介護分野は、絶対発展すると思っている。

(問) 生徒を送り出すときに、特に気をつけていることは。

外国に何年も行くとなると、気持ちの面とかでもいろいろな問題を抱えたりしている人、ナーバスになっていく人達もいると思うが、その辺りで気をつけていることは。

(答) ベトナムには、看護の専門学校や看護短期大学はあるが、介護の学校はないため、介護のことをきちんと理解していない人が多い。

そのため、送り出す時に、まずは、介護の仕事を説明し、きちんと介護の仕事を理解してもらわないと、日本では仕事ができない。

ですので、弊社ではプログラムの説明をする時に、介護と看護の違い。また、日本での介護の仕事はどのような仕事をするのかを説明した上で、プログラムに参加してもらっている。

例えば、おむつ交換やシャワーの援助、食事等、いろいろな仕事、医療の言葉も学生に説明しなければならない。



ベトナムの介護に係る質問



将来の目的に係る質問

【学生への質疑】

(問) 将来、例えば技能実習生として、日本に行こうと考えていると思うが、将来どういう目的を持って今勉強をしているか。

例えば、ベトナムに戻ってきて介護人材として働こうと思っているのか、或いは他に目的があるのか。

(答) まず、この仕事を通して、日本語をもっと勉強したい。

日本語が上達した上で、仕事でちゃんとスキーム、ノウハウを覚え、そしてベトナムに戻ってきて、戻った後でも、介護関係の仕事をベトナムでやりたいと考えている。

(問) 日本に来るにあたり、不安に感じていることはあるか。

(答) やはり異国で異文化であるという心配はある。

ただ、心配するだけでは駄目なので、解決策として、日本語の勉強

に力を入れておきたいと思う。

(問) 千葉県にどのような印象を持っているか。

(答) 私が知っている限りだが、千葉県は日本の中でもなかなか綺麗な地域だと聞いている。そして成田空港という国際空港もあると。また、ベトナムで営業しているイオンモールも、実は千葉からスタートしている。

何より、気候はすごく穏やかで、過ごしやすいと聞いている。

(問) 千葉県を選んでもらうためには、こうした方がいいというアイデアがあれば、ぜひ教えていただきたい。

(答) 知名度というか、知ってもらうための宣伝というのは必要になると思う。

(問) これから外国で働かれるということだが、その他の国ではなく、日本を選んだ理由は何か。特に今は円安も進んでいるので。別の聞き方をすれば、日本のどこに魅力を感じているか。

(答) 私が日本を選んだ理由は、非常に経済的に進んでいる国で、近代的な環境であり教育環境もものすごく整っており、日本人からいろいろ学べるという期待感も含めて選んだ。日本人は真面目だから日本人の仕事ぶりを学びたい。

もう一つはやはり日本に行くことで、日本語も上達する。日本語を覚えるというのも一つの目的である。

また、日本は料理も美味しく、景色もすごく綺麗ななので、そういう国を自分でも見たいと思っている。



学生との会談の様子

(問) 皆さんはここで日本語を学んでいるが、普段は寮に住んでいて、ここに来て学んでいるということか。

また、学ぶにあたり、学費は公的に出ていると思うが、生活費も支給されているのか。

生活費は、他の仕事をするのに比べてどのような水準か。また、生活費は、家族のためにも使う必要があるような環境か。

(答) 私たちは、この施設に近いところにある寮に住んでいる。移動で時間がかからないように。学費は御想像の通りです。

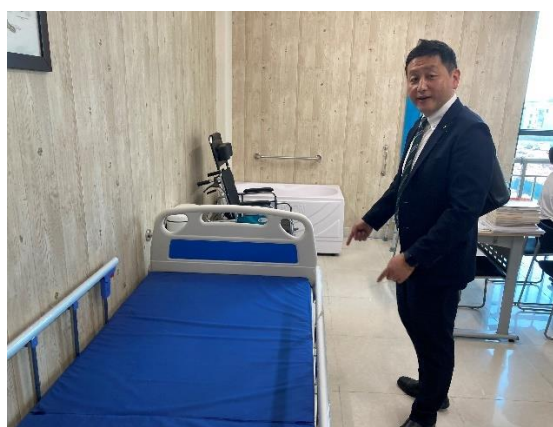
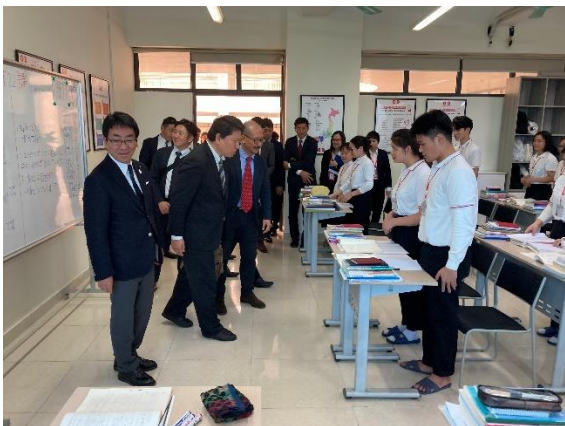
生活費に関しては、食事代を除いて全ていただいており、言い換えると私たちが負担しないといけないのは、食事代だけである。

短い期間でしっかり勉強して日本語を上達するために、フルタイムを勉強にかけている。そのため、バイトをしている時間はない。そうするとやはりわずかだが、食事代は家族から支援してもらっている。

(問) 介護の仕事について学ばれていると思うが、このイメージであったり、介護の仕事に就くことへのモチベーションを皆さんはどのように感じているのか。

(答) まず、介護という仕事は年を取ってきた方のケアをするというイメージが強いです。そうすると、その方の長い人生で経験してきたいろいろな経験もあるかと思う。そういう方と物理的に接して、いろいろな事を学べるかというのが一つ。

もう一つ、寝たきりの方、私の祖母もそういう状態で、体半分不自由だったのですが、亡くなる前は、自分の手で祖母をケアしていて、やはり人をケアするという事は、すごく意義のある仕事だと感じている。



校内視察の様子

8 在ベトナム日本国大使館

(1) 日 時 2023年11月18日(土)13時30分～14時30分

(2) 調査事項 ベトナムの国政情勢等について

(3) 経 過

初めに、在ベトナム日本国大使館の松木輔総務参事官から歓迎の挨拶があり、その後、武田団長が調査協力に対するお礼の挨拶を行った。続いて、同総務参事官よりベトナムの国勢情勢等の説明があり、質疑応答を行った。



松木総務参事官による挨拶

(4) 調査概要

【ベトナム国政情勢】

○人 口：約9,946万人(2022年) 日本の5分の4程度

面 積：約33万km²(日本の約0.8倍)

1人当たりGDP：4,110ドル(2022年)

GDP成長率：2.58%(2021年)、8.02%(2022年)

【経済情勢】

○ベトナムの経済は一言で言うと、かなりイケイケモードというか、高度な、高水準の経済成長をしている。

コロナ前は7%、コロナ禍においても、2.91%、2.58%という成長をしており、ASEANの中でもダントツの一番である。2022年も8%ということで、今後の見通しとしても世銀は4.7%というものを示しているが、これは各国との比較においてもかなり高い水

準になっている。今後ともASEANの中でみても、ベトナムは高水準の成長を維持するのではないかという見方が大半である。

- 他方でインフレ率については、消費者物価指数（CPI）を見てわかるとおり、概ね3%前後ということで、かなり低水準に抑えられている状態である。
各国、特に欧米諸国を中心にインフレがかなり進んでいるが、その中においても、かなり低水準にインフレを抑えつつ、経済成長を遂げているというのがベトナムの現状である。
- ベトナムと中国の経済状況の比較だが、今、中国への外国直接投資はかなり減少傾向にある。これは中国の国内政治が抱える様々なリスクを勘案されてのものかもしれないが右肩下がりということで、中国への外国からの直接投資は減ってきている。
- 他方で、ベトナムはどうかと言うと、右肩上がりとはまではいかないが、徐々にではあるが、投資が増えてきているという状況である。
- 貿易ということに焦点を当てると、コロナの影響で2021年は、世界全体で見たときに経済はかなり下がり調子であったが、ベトナムに限って言えば、2021年も含めて貿易額が上昇しているところである。2006年以降2022年までずっと右肩上がりで、貿易規模が増えている。
- 国別貿易収支はというと、ベトナムの輸出超過、つまりベトナムが貿易収支の黒字になっている国というのは米国やEUを中心にしている、要はこれらの国に対して、安く買ってきたものを高い価値で売っているということで、黒字になっている。
- 逆にベトナムがより多くのものを輸入している国や地域、これについては中国や韓国や台湾が中心になっていて、今この辺りの国からいろいろなものを輸入して、それに付加価値をつけたものを、EUや米国といった国に輸出している。
- 日本はどうかと言うと、プラスとマイナスが均衡しており、バランスのとれた貿易を行っている状態である。



経済情勢に係る説明

【日越関係】

- この前、両殿下が訪問された時の一つの目的というか大きなテーマが、ベトナムと日本との人のつながりというところで、ベトナムと日本の地方レベルの人と人との交流の発展、日本とベトナムの国と国との関係のベースにあるのではないかと、ということに両殿下もかなりご関心を持たれており、今後そういったところを更に強化していくことが両国間の関係の強化につながるのではないかと強く仰られていた。
- ベトナムは、重要な生産拠点となっており、ASEAN10カ国の中では最も有効な投資先であるということが言われている。
ベトナムにとって日本が一番ではないが、主要な投資国であり、また貿易相手国でもあるという状態である。
- ベトナムに対する投資額という意味では、最近までは押しなべて日本が一番投資をしていたという状況であるが、最近では韓国やシンガポールといった国の投資も増えており、中国、韓国、シンガポール、日本あたりが、ベトナムへの投資を最も活発にやっている国である。
- 今後こういった国に対して投資をしていきたいかというような、日本企業の海外事業展開に関して、ジェトロが日本の企業にアンケート調査をしたところ、大企業の進出意欲が最も高い地域がベトナムであった。
- 中小企業も含めた日本企業全体で見ると、一番投資をしたい国としては、やはり米国が上がっているが、大企業だけに限ると、最も投資先として注目しているのはベトナムと言う結果が出ている。

- 今後、ベトナムの市場が拡大していくと思うかという認識についても、日本企業の多くが、今後1年の事業展開の方向性については、ベトナムでの事業を拡大していくと答えた企業が約6割を超えており、ASEAN全体では4割ぐらいのため、多くの企業の方々が、事業を拡大していく策としてベトナムに大きな注目を寄せているという状況である。
- 他方でベトナム側も、日本企業の誘致というのはかなり熱心に行っていて、今1人当たりのGDPが4,000ドルぐらいなのだが、2045年までには10,000ドルを超えていきたいと、先進国になりたいというような目標を立てており、そういう中でやはりこれから途上国から中進国になって先進国に上がっていくためには、自前の技術ないし自前の工業というのがどうしても必要になってくるという認識をベトナムも持っている。
- それはかつて日本が戦後、傾斜生産方式をとって、日本のお金をまずは製鉄に当てて、そこから重工業を拡大して、それで富を蓄積して分配していく中で、先進国になっていったように、ベトナムの今後の成長を助けていくコアになる事業、コアになる産業は何なのかというのを、今後ベトナムは真剣に考えていく必要があるという中で、ベトナムとしても、やはり日本の技術というのを、きちんとベトナムに伝えていくという形での日本企業の誘致に今かなり関心を持っていて、工業団地やスマートシティの建設、交通エネルギーインフラの整備といった分野についても、かなりオファーがきているところである。
- これだけ言うとすごく日本が特別視されている感じがあるが、当然ベトナムはこういうお願いを、例えば韓国や台湾など、いろいろな国や地域に対してもお願いしているので、必ずしも日本だけが特別視されて優遇されているという状況ではない。
- そういう中で我々としても、特にインフラ等については、ODA、政府開発援助をしていく中で、できる限り手助けをしていこうということを念頭に、これまで事業を展開してきている。
- 日本の対ベトナムODAは、実は最近実績があまりよくなくて、円借款では、2017年までは1,000億円であったが、2018年はゼロ、2019年は100億円程度で、2020年にまたゼロになって、2021年2022年も100億円程度になっていて、ここ数年はかなり円借款が

減ってきている状況である。

- そういう中で、今年は 609 億円まで積み上がっているが、こうした円借款をベトナムのニーズにあうような形、できる限りベトナムのインフラ整備、ベトナムが今後先進国になるための基礎を作っていくことができればと思っている。
- 今、日本政府の方で手掛けている具体的なベトナムの O D A 事業は、一つ目がホーチミン都市鉄道 1 号線建設事業、二つ目が南北高速道路である。
- ベトナムは、大体面積が 30 万平方キロメートルという中で北から南まで 3,000 キロと、日本と同じように南北に細長い国なのだが、日本とは違いきちんとした鉄道網が普及していないので、例えばハノイからフエとかダナンないし南にあるホーチミンに移動しようというときに、基本的に移動手段は飛行機となる。
- そうすると物資を運ぶにしても、コストの面が出てきてしまうので、そういったところで、やはり南北にきちんとした物資を輸送するという観点からの鉄道網ができることは、この国の発展に極めて重要なことであり、そういったところを下支えしていくということが重要だというふうに思っている。
- こういう O D A を通じてベトナムとの協力をより進めていければというのが現状である。
- 先ほど人と人との交流が、二国間関係のベースにあるという話をしたが、日越間の人的交流というのは二国間関係の基礎となっていると思う。
- そういう中で、今在日ベトナム人の数は増加傾向にある。昨年 12 月末現在で約 50 万人、これは前年比で 13% 増ということだが、多くのベトナム人が今日本で暮らしている。これは国別で見ると中国に次いで 2 番目に多い数になっている。2012 年は 5 万人であったので、それが 2022 年 12 月末で 48 万人になったということで、日本に住むベトナムが 10 年間で約 9 倍に増えているということである。
- 在留資格別でこの 50 万人を見ると、技能実習生の占める割合が最も高くなっており、約 4 割を技能実習生が占めている。また、特定技能労働者や技術者といった、その技能実習生より一段階引き上がった専門人材と言われるような人々も、年々増加して

いる状況にあり、今では大体全体の約3割を占めるようになってきている。

- こうした日本に住まれているベトナムの方々というのは、当然、日本にとっても、ベトナムにとってもそうであるが、日本の経営者にとってもかなり重要な役割を占めるようになってきている。そういった中で全体の約4割を占め、一番多いコアとなる技能実習生について、最近の動向を少し申し上げると、実は最近はこの技能実習生の伸びが鈍化している。
- これは、査証発給件数からも明らかで、コロナ過で行きたくても行けなかった人たちが、今コロナが終わりどっと日本に行ける状態になっているわけだが、そういった人たちを含めても、コロナ前の10万人という水準に達していないというのが現状である。ですので、絶対数という意味では、日本にこられるベトナム人がかなり多いということに間違いはないが、すごく単純な言葉で言うと、日本ブームみたいなものは今そこまであるわけではなく、少しずつ増加傾向というのは鈍化してきている。
- なぜベトナムの労働者が今あまり日本に来なくなってきたのかというと、その理由として、まずやはり円安、これはかなり影響を受けている。ベトナムの方々日本に来ている一つの理由は、日本で働いてそのお金を家族に仕送りをするということであり、その仕送り額というのが、円安のせいで、かなり目減りしている状態にある。
- 最近、技能実習生を送り出している企業の方々と話しをしたが、感覚的にだが、仕送り額がコロナ前の約6割程度になっているということであり、ベトナムの労働者の方々からしても、家族への仕送りという観点でいうと、日本の魅力というのは今、少しずつ下がっているのかなというところである。
- さらに言うと、日本での物価上昇の影響があり日本での生活に必要な金額が増え、残りの給料をベトナムに仕送りしようにも、今度は為替の影響があつてその額がさらに減っていくということで、二重苦のような状態に陥っているという状況である。

【教育関係について】

- ベトナムでは、日本とは教育の年数が少し異なっており、小学校が5年、中学校が4年、高校が3年となっている。なお、小学校と中学校が義務教育となっている。
- 日本と異なりベトナムは9月から学校が始まり、9月から12月が前期、1月から5月が後期と、ほとんどが2学期制をとっている。
- 教室等が不足している場所もあり、お昼のコースと夕方のコースという形で2部制をとっているような学校も多数ある。
- 高校進学率は都市部で約70%、大学進学率は約28%となっており、まだまだ日本の水準に比べると高くない状況である。
- ベトナムの方々の一つの特徴として、理系人口がものすごく多い。今、具体的な数字を持ち合わせていないが、機械工学等、モノをいじる系の学科に行かれている方が男女問わずものすごく多くて、そういう意味でも、IT分野や工学分野に就職していく学生が多く、そういうバックボーンで能力を持った人たちを中心に、外国の企業から雇用されていっているというのは現状としてある。
- 日本の支援としては、一つは、高専教育の導入支援ということで、高専機構とか、宇部高専等の支援によって、ベトナムの国内の複数の短期大学でプログラムを実施している。これも理系人口が多いというところにリンクしていることもある。
- その他無償資金協力等によって、小学校や幼稚園も整備をしており、JICA等による教育支援、また、イオンやファーストリテイリング、こういった財団の方でベトナム人学校を対象とした奨学金も実施している。
- 留学生も非常に多い状態で、2022年度のベトナム人留学生は約3万7,000人という水準でこれも中国に次いで第2位ということになっている。

【2 国間交流】

- 日本への関心を持つきっかけとしては、やはりアニメである。こういったソフトコンテンツがものすごくベトナムでも強いし、あとは、和食や日本製品への信頼といったものもよく見られる。和食人気はものすごくあるし、ベトナムの和食は驚くほどクオリティが高い。それでいて価格はそこまで高くはない。日本で食べるような

和食とは少し違うが、それでも A S E A N 10 各国の中では一番おいしいと思うし、「食」という意味においては、日本との親和性とはかなり高いと感じている。

- 漫画もどういう構造になっているのかわからないが、日本の単行本がベトナム語に翻訳されて、ベトナムの本屋で売られているのだが、価格が日本の3分の1ぐらいである。おそらく、出版業界がかなり安く出版していたり、紙にかかる印刷コストが安いとか、そういうところでマージンをかけずにやっているからだと思う。
- この前外務大臣がベトナムを訪れた際にも、本屋に立ち寄りたいたいという希望があったので本屋に行ったのだが、大臣が視察されている横でも現地の子供たちが名探偵コナンを買っていたり、そういうところがある。日本の漫画というのものはものすごく安心を持たれている。
- 日本製品の信頼という意味では、やはり日本製の家電が、ベトナムで売っている他の家電より2割3割高くても売れているし、あとバイクはもう、皆さんその辺を見ればわかるとおり、ホンダのバイクというのが本当にたくさん出回っている。
- 大学についても、今ベトナム国内の日本の大学の拠点が35大学、48ヶ所あり、これは中国、タイ、米国に次いで4番目ということになるが、様々な日本の大学の拠点がベトナムに進出してきており、大学同士の協力協定、覚書も、2020年と少し古いデータだが、1,665件あるという状況である。
- ベトナムにおける日本語教育という意味では、日本語学習者というのが17万人いて、世界で第6位、A S E A Nで第3位である。
- 理由はわからないが、ベトナム人の日本語の理解能力というのは、ものすごく光るものがあり、大使館でもベトナム人の方が複数働いているが、普通の日本人の感覚でお話ができる方ばかりである。
- 日本人にとってベトナム語はものすごく難しいが、なぜかベトナム人には日本語はそんなに難しくなく、少し日本にただけでペラペラになってしまうし、日本に行かずベトナムで勉強しているだけでもペラペラになる人がたくさんいるので、そういう意味でも、ベトナム人が日本で勉強して、日本で仕事を見つけていくというのは、多分やりやすい感覚があるのだろう。
- ベトナムの若者から見た日本ということで、先ほどの話と共通す

るところがあるが、若者は日本のどこに魅力を感じているのかというのも、漫画などに加えて、コスプレもかなり人気があるようであり、去年はダナンで漫画とコスプレのフェスティバルというのが開かれていて、進撃の巨人とか鬼滅の刃とか呪術廻戦などかなり人気があった。

- それが反映しているのかどうかわからないが、安倍元総理が亡くなられた時に記帳をやらせていただいたが、かなり多くの若者が来ていた。

安倍総理がどういう方で何をしたのかというのは、あまりわかっていないのではないかなという方々も含めて、多くの方々がボランティアをしているのを見ても、やはりこういうソフトパワーというか、文化的な要素に引きつけられて日本に対するイメージをかなり良く思っているのだろうと感じた。

- ただこれは日本に限ったことではなく、同様に、中国や韓国のカルチャーというのも、ベトナムの若い人たちに浸透している。

韓国で言うと、K P O Pと言われるような音楽的なコンテンツや、映画というのはものすごく盛んで、ブラックピンクとか、つい最近ベトナムに来て、ものすごく大きいコンサートをして帰っていましたが、コンサートを見たベトナム人の女の子が嬉しすぎて気絶してしまうような、そういう人気を博していたりするし、韓国の映画は字幕が当然ついているが、ベトナムで公開されていて、名探偵コナンと韓国の恋愛系のドラマが、2大映画といった感じで映画館に並んでいたりする。

- 中国も、小説とか音楽とかドラマとか、そういうソフトコンテンツはベトナムにかなり進出してきていて、そういう意味では日本の1人勝ちというわけではないが、こういったコンテンツはベトナムの中でも人気がある。

【自治体間交流】

- 日越関係が具体的に上り調子というかどんどん友好関係が深まっていくので、自治体間の交流もかなり進んできており、これは我々にとっても非常にありがたいことである。
- これまでに85件以上の覚書が結ばれており、この大半は、2013年の国交成立40周年以降の10年間で成立していることからみても、

ここ数年本当に右肩上がり、自治体間の交流というのが増えてきている状態である。

- そうした自治体とベトナムとの交流関係が強化されていく中で、具体的な協力の覚書の締結といったものも進んでいて、千葉県は、労働・傷病兵・社会問題省と協定を結んでいると聞いている。
- こうした中で、ベトナムの地方にある省と日本との交流の促進を目的とした、ミートジャパン 2023 というイベントが 11 月に開催され、多くの関係者が出席された。
- 日越間の交流について、今年は 50 周年ということもあり、9 月には秋篠宮皇嗣同妃両殿下に訪問していただいた。
また、50 周年を記念した新作のオペラ「アニオー姫」をゼロから作り、殿下が来られた際に鑑賞いただいたりもしている。
「アニオー姫」というオペラは、実際にあった本当の話を歴史的な史実に基づいて、ゼロから作り上げられているオペラで、ベトナム公演がかなり好評だったこともあるのだが、実は 11 月の頭に日本でも、昭和女子大学の方で 1 日限りということで公演をしている。
- この 50 周年という中で、自治体とベトナム政府の間でも様々な事業が行われており、50 周年事業ということで経済界を集めたセミナーが行われた。あとは着物アオザイファッションショーということで、両国の伝統衣装を着てファッションショーをしたり、もしくは伝統芸能の狂言を公演をしている。またベトナムの全土で日本のフェスティバルが行われており、今まさに、北海道フェスティバルや神奈川フェスティバルを実施している。
- 既に終了したものとしても、ダナン、ホイアン、ホーチミンで行われて、ホーチミンでは 48 万人が参加したということである。

【内政について】

- ベトナムでは最近共産党の指導で汚職対策というのが非常に進んでいて、汚職対策として、今年 1 月に国家主席と副首相 2 名が交代するという出来事があった。
実際、こういった汚職対策というのが、ベトナムの経済制裁や外交政策に大きな影響を与えているものではないので、あくまでこれは国内事象の一つであるが、常に国内において、これから 2026 年に次の党大会があるのだが、誰がそこで書記長になるのかという

ことも含めて、政治的な争いが国内では激しくなっていており、そういった中で、日本の企業が安定的にベトナムで活動していくためにはどうしたらいいかというのは、常々我々も考えていかなければいけないトピックになっている。

- 幸い日本は、かなりベトナムの政治指導者の方々からは好印象を持たれていて、どの方からも日越関係については広い支持が存在している状況である。

これから 2026 年の党大会に向けて、ベトナム内政というのはガチャガチャするとは思いますが、日本に対する支持が揺らぐことはないと思うし、何か政治の駆け引きの材料に使われるといったようなことも基本的には想定し難いと思う。

- ベトナム共産は、共産党一党体制ということになっている。その中で一党体制を作りながらも、我々トップフォーというふうに言っているのだが、4 人の人物に権力を分散させることで、集団指導体制のようなものを取っているというのが、ベトナム側から我々に対してよくある説明である。

- その 4 人は誰かというと、党書記長のグエン・フー・チョン、79 歳ですが、これが党のトップである。次の国家主席ヴォー・ヴァン・トゥオン、これが来週日本に来ることになるが、この方が国家元首ということになる。次に、政府のトップとして、首相のファム・ミン・チンという方がいて、国会、議会のトップとして、ヴォン・ディン・フエという方がいる。

- この 4 人が、互いにバランスを取りながら意思決定をしていくということに、一応表向きはなっていて、そういう意味では集団指導体制ということになっているが、やはりベトナムの政治システムでは憲法を見ると、まず党があって、その党の意向を支えるために国会があって、その国会の下に政府があるので、そういった観点でいうとやはりこの中では党書記長のグエン・フー・チョン氏の持つ影響力が一番大きいのだろうなという気がしている。

- この方は今 79 歳になっていて、ベトナムは、1 会期が 5 年で、この方は、党規則で党の書記長というのは連続で 2 回、10 年しかできないのですが、既に 3 期目に入っていて、2025 年末で 15 年を迎える。

○2026年に次の党大会があり、新しい会期第15会期という、次の5年が始まるのだが、その5年にこの4人がどうなるのかというのが一つポイントになっており、党のルールでは、この会期の開始時に65歳以上の人というのは、本当はこの4つの椅子には座れないことになっている。

それでいくと、この4人の中で、2025年時点で、この椅子に座り続けられる人は、本来であれば、国家主席のヴォー・ヴァン・トゥオン氏しかいないのだが、この辺はルールがあってないようなところもあり、実際この4人のうち3人は65歳を過ぎても、この椅子に座っているということからわかるように、党の規則がありつつも、年齢制限というのが、どれぐらい本当の条件として考えられているのかというのは少しわからないところがある。

【外交関係】

- 今、日越関係は広範な戦略的パートナーシップ関係というものになっている。これはぜひ覚えていただければと思うのだが、ベトナム側は相手国の友好度合いをこのパートナーシップで色分けしており、具体的にいうと、「何のパートナーシップも構築できてない」、次が、「包括的パートナーシップを組んでいる」、その次が「戦略的パートナーシップを組んでいる」、その次が「包括的戦略的パートナーシップを組んでいる」というふうに四つのレイヤーに分けて、国との関係を区別している。
- 日本については、今、広範な戦略的パートナーシップということになっているので、ベトナムの基準で言うと、戦略的パートナーシップと包括的戦略パートナーシップの間という位置付けになっている。
- ベトナムにとって最上最良である包括的戦略的パートナーシップというものを結んでいる国は、中国、ロシア、韓国、アメリカ、インド、こういった国々になっていて、目下、日本とベトナムの課題は、日本とベトナムの関係もその水準に早く引き上げるということで、今、目標にして取り組んでいるところである。
- なぜそういう取り組みをしているかというところの理由として、日本のパートナーシップの重要性が拡大している原因として、一つは米中対立の中で、ベトナムの置かれている戦略的關係が複雑

化深刻化して、米中双方との関係を重視しつつも、他の国との関係を強化していく必要が出てきているというベトナム側のニーズと、実態としてベトナムの経済発展のためにも、日本が必要不可欠のパートナーになっていくというところが、ベトナムにとっても日本の重要性として挙げられる。また、日本にとっても同様に、ベトナムというのは「自由で開かれたインド太平洋」という政策を実現する上で重要なパートナーになっている。

- さらに安全保障面でも、ベトナムは南シナ海に面している最大の国の一つになるので、この地域とどういうふうに連携していくのかというのは、日本にとってはシーレーンの確保を考えていく上では極めて重要になっている。
- また、米中対立からサプライチェーンのシフトが起きている中で中国に頼れなくなっている、では物資物流をどこに頼っていくのかというところで、ベトナムが重要な拠点になりつつあるといったこともある。



外交関係に係る説明

- そういった中で、今年の5月に行われたサミットにおいては、日本は議長国として、ASEANでは議長国をしていたインドネシアを除けば唯一ベトナムを招待し、ベトナムに対して、日本とベトナムの今後の関係というのをさらに高い次元に引き上げていきたいと思いますということを約束したというような状況である。
- ベトナムが実際外交という意味で言うと、アメリカとの関係では、今かなり関係を強化しているところである。
アメリカは今年の9月までは包括的パートナーシップというレベ

ルになっていて、通常、次は戦略的パートナーシップに上がるのだが、それをさらに超えて、今回二段階格上げで一気に包括的戦略的パートナーシップに引き上がったというのは、かなり大きなインパクトがある出来事として受け止められている。

- 対中関係については、歴史的な背景もあって警戒しつつも、隣国としてつき合わざるをえない相手として、一定の距離をとりながらつき合っているというのが状況である。
- ロシアについては、ソ連時代から伝統的な友好関係があり、特にベトナムが中国と戦争していた時期も含めて、最後まで武器の支援等をしていたのはロシアであり、今のベトナム共産党指導体制の60代以上の方々というのは、大体ソ連に留学経験があり、そういう意味でもソ連に対して、かなり信条の意味でも近いところを感じているので、外交のことだけを考えるとものすごく重要な国にはなっていないのだが、心理的にかなり近いものを感じているという意味で、伝統的な友好関係があるというような状態である。

(5) 主な質疑応答

(問) 観光誘致の考え方、ベトナムの方々が観光先を選ぶポイントというのはどのような形になっているか。親日と言われている中で、実はベトナムのダナンには千葉県で有名な三日月ホテルがあるが、千葉県はどれくらい知られているのか。

(答) 観光の面で、千葉県を選ぶポイントというところでは、ベトナムの方々が特に日本に行くタイミングというか日本のイメージが春と秋で、それは詳しく聞くと一つは桜でもう一つは紅葉である。そのため、春・秋に日本に行った方が多くて、逆に意外なのが日本には冬はスキーがあって、夏は海に泳ぎに行くとかそういうものもあると思うのだが、夏に日本に行って遊びにという発想は、そもそもここは暑い国なのであまりないようで、冬は冬でお金を持っている人たちはヨーロッパへ行ってしまふ。そうすると、やはりそれ以外の季節で住みやすく、何か綺麗な風景が見えるということで、日本は人気が高いと言える。

日本の印象という意味では、きちんとした統計資料があるわけではなく、かなり主観的な説明になってしまうが、日本の印象はや

は「ハイテク」というのと「綺麗」というのをよくベトナムの人たちからは聞く。

ハイテクというのは、ベトナムの人達は、日本から帰ってくるときに荷物が10倍ぐらいになりますが、それはやはり日本で家電や薬であったり、特に女性は、服や化粧品を買い占めるといのはよく聞く。

さらには、育児系の用品、赤ちゃんのいろいろな身の回りのケアをする用品なども、日本で買っている人が多いと聞いて、やはりそれを聞くと安全性とか清潔とかで日本は人気があって、さっきの説明と若干矛盾するが、買い物だけをしに日本に行く人も多い。

そういう意味では、私はやはり観光と言うと何かを見てもらうとか、何かレジャーを楽しむというイメージがあるが、そういうものではなくても日本は物理的に近い国なので、行って、大量に物を買って帰ってくるということにすごくニーズがあるようである。

あと若者はやはり都会に憧れるようである。技能実習生でも問題になっているのだが、技能実習生でうまくいかない人たちというのは、大体、地方から出てきて、新宿とか渋谷とか大阪とかの風景に憧れて、飛び込んで行って、それでうまくいなくてという人が多いそうで、そういう苦勞をされている方々のお話を聞くと、やはり日本に行くのがかっこいいとか、日本に行くというだけで自分のステータスが上がるという中で、その日本のイメージというのは大都会のイメージで、そのイメージを見に行きたい、楽しみたいという思いも結構強いのかなという気がする。

私は泊まったことがないのだが、三日月ホテルはダナンですごく有名で、ダナンの中では有名なホテルの一つではあるが、イコール千葉県というところまで発想が及んでいるかはわからない。

私の中ではベトナムの中で、千葉県のイメージがすごくいいイメージがあるが、それは単純に私が普段よく知っている現地職員が千葉大学出身の人たちなので、それで引っ張られているのが大きいのかなという気がするが、やはり実際に行った県について好きになって帰ってくる人たちが多いという気がする。それなので少し答えになっていないが、正直申し上げると、日本の良いイメージを語るときに、京都は別として、それ以外に何々県のどこがいい、みたいなことはあんまり言ったことはないかな、という気がする。



観光誘客に係る質問

(問) 日本の水産物というものが台湾で評価されていた。日本とベトナムの間ではいろいろと制限があると思うが、千葉県の水産物を売り込むにはどのようにすればよいか、レクチャーいただきたい。

(答) 水産物については、特に、千葉県産ということで、何か具体的なデータを持ち合わせていないので抽象的な説明になってしまうが、2023年8月以降、ALPS処理水の問題がかなり全世界的にあり、特に中国なんかホタテの輸入を止めるとかいろいろな話があったが、ベトナムは全くなくて、ベトナム人に聞いても、でも科学的に大丈夫なら問題ないよね、という感じである。それなのでそういった面での安全性とかということでは、あまり大きな影響は出ていないというふうに思う。

千葉県の港から、直接どういうものが来ているのかということも少し調べてみないとわからないが、大体、おいしいと有名な日本食のお店に行くと、築地直送である。朝採れたものが次の日までには普通に届いていて、それを提供しているというのもよく聞きくし、築地というと人が来る、そういうことを話しているのも聞いている。

水産物であまり細かいデータの持ち合わせがなくて恐縮だが、一般論としては、日本の食べ物、日本で採れたお魚というだけで、値段が高く、人気も出ているというのは間違いないという気がする。



各県のイベント等に係る質問

(問) 各県のフェスティバル等が開催されているが、どのような内容でどのようなものが現地の方に向けているのか。

(答) 各県それぞれなのだが、やはり特産品のブースは人気がある。北海道の方が地元のものを持ってきて出すと、それがすごくベトナム人からも好評を博している気がするし、あとコンテンツ的には踊りとか、よさこいとか、そういったものを行っているイメージがある。



在ベトナム日本国大使館にて

9 イオンモール ロンビエン

- (1) 日 時 2023年11月18日(土) 15時00分～16時00分
- (2) 調査事項 県産農林水産物・食品の輸出促進に向け、ベトナムにおいて日本産食品等を取り扱うスーパーを視察し、取扱状況や課題等を調査し、県産品の輸出拡大に向けた取組を支援する。

(3) 経 過

初めに、イオンモール ロンビエンの都丸 北部イオンモール3店舗統括責任者から挨拶があり、続いて、竹内副団長調査が協力に対するお礼の挨拶を行った。続いて、同氏から概要の説明があり、質疑応答を行った。

その後、店内を視察した。



都丸氏による挨拶

(4) 調査概要

【イオンモール概要】

- ベトナムにおける3号店、首都ハノイエリアにおいては1号店として、2015年10月にイオンモール ロンビエンをオープンした。
2023年11月現在、ベトナム国内で6店舗のモールが営業しており、今後も店舗数を増やしていくことを計画している。
- なお、イオン株式会社の本社は千葉県千葉市美浜区にある。

- モールに来るお客さんは、日本よりだいたい10歳以上若い。
年齢分布を見ると、39歳以下で全体の約75%となっている。日本の場合は60代が30%程度いる。
- メインの客層は中間層の方で、世帯月収が2千万ベトナムドンから4千5百万ベトナムドン、日本円にすると大体12万円から27万円ぐらいの層である。
新卒の給与が3万から5万円ぐらいである。
- 日本に比べると物価は、物にもよるが大体3分の1から6分の1ぐらいという印象を受けている。
- 2021年のデータでは、イオンモールから自動車で20分圏内に約120万人の方が住んでいる。ハノイ全体では約1,000万人程となる。
- 年間の来場者数は、2022年で1,380万人、今年は1,450万人ぐらいになると思う。
- 売上金の方は、毎年110%程度伸びている。
出店するとほぼ間違いなく売れるという状況になっていて、ベトナムの企業には納得して出店していただいている。これが日本だと1度空きができてしまうと中々埋まらないが、ありがたいことにどんどん次がくるという状況である。
- レストランを見ていただくと、日本と違ってとにかく焼き肉のロースターとか鍋を温める熱源の機械があり、こちらのメインのごちそうを聞いてみるとお寿司とかすきやきとか天ぷらではなくて、みんなで同じものを食べるのが、ごちそうという認識である。



イオンモールの概要説明

(5) 主な質疑応答

(問) 日本産あるいは千葉県産の物をベトナムで販売するにはどのようにすればよいか。またその余地はあるのか。

(答) 例えば企業が単独で出店しようもしくは単独で許可を得ようとする、ライセンス関係が難しいので、既存の流通に乗せていただくのが圧倒的に早いと思う。イオンリテールとの付き合いがあればそこに乗せていただくというのがダントツで早い。個人で輸入をしようという方もいるが、最終的に港で止められてということがあるので、日本の感覚とは違う許認可関係が一番難しいのかなと思う。クオリティは、ジャパングオリティはやっぱりみなさん日本の物は良いものと刷り込まれているので、そこを押し出すのは全く問題ないが、持ってくる前が勝負かなと一番感じている。



県産品の輸出に関する質問

(問) 物価が3分の1から6分の1との話であったが、価格をそのまま下げて薄利多売のような形でやるのか。

(答) 日本の物はある程度高級でも売れるのだが、関税がとても高いので、お酒類を見ていただくと、例えば黒霧島が一升で6,000円から7,000円ぐらいする。だいたい日本では1,800円から2,000円ぐらいで3倍ぐらいとなるが買う人は買う。

ただ世帯月収が10万円から15万円の人には6,000円の焼酎は中々飲まない、ターゲット層をしっかりと絞った上でどういった物を持ってくるか。

価値を認めた高い物をしっかり作って持ってくるか、安い物であれば量を既存のルートに乗せて沢山持ってくるかこのあたりの勝負かなと思う。



モール内の視察の様子

10 フジマート

- (1) 日 時 2023年11月18日(土) 16時30分～17時30分
- (2) 調査事項 県産農林水産物・食品の輸出促進に向け、ベトナムにおいて日本産食品等を取り扱うスーパーを視察し、取扱状況や課題等を調査し、県産品の輸出拡大に向けた取組を支援する。

(3) 経 過

初めに、フジマートの樋口氏から挨拶があり、続いて、竹内副団長が調査協力に対するお礼の挨拶を行った。続いて、同氏から概要の説明があり、質疑応答を行った。

その後、樋口氏及び小牧氏と店内を視察した。



樋口氏による挨拶

(4) 調査概要

- 我々住友商事と、BRGグループという現地のローカルのパートナーだが、いくなればコングロマリットに近い形で、もともと不動産をベースにしてどんどん成り上がっている会社があるのだが、その会社と住友商事の合弁事業としてフジマートを5年前の2018年からやっている。
- 我々は住友商事からの出向で、我々の他に社長と営業1名の合計4名が住友商事から出向している。また、日本のスーパーマーケットのサミットから現状4名。ただ、1名は今週日本に帰るので、3名が出向してきており、合計で日本人は7名となっている。

- 基本的に我々日本人がオペレーションをしている。パートナーであるBRGもスーパーマーケットをやっているのだが、フジマートについては、基本的に日本のノウハウやオペレーションを、我々自身がやっていく。これは日本のサミットで培ったものをベトナムのお客様に提供していくことを目指しているので、口出しはほとんどされずにやっている。
- ただ、BRGは不動産を数多く所有しているので、この物件もBRG所有の物件であり、出展サイトの紹介を受けたりであったり、アドバイスといった協力は交流を盛んにしている。
- 現状ベトナム国内に4店舗。2018年の12月に1号店が開店しており、2023年6月にようやく4店舗目が開店した。ここは3号店である。この12月にも開店を予定している。
2028年までに50店舗を目指すという形で今出店を加速している現状である。
- よく勘違いされるのが、例えば日本の駐在員の方やその奥様方も当店に来られるのだが、日本の商品がすごく沢山あるわけではない。
- 我々が目指しているのは、ベトナム人が買う商品を日本のサービスとか品質管理で提供するというところにあるため、日本人が来られた時に、予想外に日本の商品が少ないといったイメージを持たれることがあるが、それはそもそものターゲットが違うということである。
- 一番力を入れているのは、生鮮食品、デリカ、ベーカリー、この辺が現地のスーパーとの差別化に繋がっている。そういった観点でお店を見ていただければ。

(5) 主な質疑応答

(問) 日本人のお客様の比率はどのぐらいか。

(答) ほぼほぼいないというレベルである。

(問) サミットで培ったノウハウを持ってくるというのは、今までこの国にはそういったものがなかったということか。

(答) フジマートに来る前にイオンに行かれているが、イオンも同じような形ではやられていると思う。我々は我々でサミットのノウハウを注入している。

(問) スーパー型のものというのはベトナムではあまり展開されていな

いのか。

(答) 日系のスーパーという意味ではもちろんイオンがいるが、イオンは今特にハノイだとマックスバリュの形態が一番多く、マックスバリュとだいたい 100 坪ぐらいの店舗面積で小型店に近い、我々はだいたい 300 坪ぐらいで、このサイズのスーパーを展開している。イオンも一部やられているので我々が唯一ではない。



取扱い商品に係る質問

(問) 取り扱っている商品は日本から輸入しているのか。

(答) 輸入品は基本的にはなく、現地調達である。海外から仕入れているものは、あっても 10% 程度である。基本的に現地のスーパーと商品もほぼ同じ、同じと言っても全然管理の仕方が違うので。

ただ商品提供の仕方っていうのが、完全に日本流というか、例えば取りやすい陳列であったりとか、品質管理も、結構現地のスーパーだとお魚とかを見ていただくとドリップという汁がベトベトと出ていたりするのだが、そういったところはかなり気を付けている。

(問) 地元の現地のスーパーだとこれだけの坪数のスーパーは中々無いと思うがどうか。

(答) W i n M a r t という現地のスーパーがあり、そことは競合することはある。ただ扱っている商品の管理やお客様のターゲットのところが少し違う。

そういう意味では、ちょっと我々の方が、ミドルアッパーに近い部分がターゲットのお客様で値段も安くはない。そこで差別化になっているかなと思うが、店舗面積という意味では、W i n M a r t はスーパーマーケットの大きさでおそらく 120 から 130 ぐらい店舗があって、W i n M a r t + というコンビニ形態も合わせたら多分 3,000 ぐ

らいあるので、相当地場では根を張っているスーパーである。

(問) 出店するにあたっての規制みたいなものはないか。

(答) 現状、我々は外資になるので、そういった意味ではローカルとは全然違いハードルが高い。そういう意味では物件を探す苦勞と許認可関係の部分で、ローカル企業との差というものは出てくる。

(問) そういう意味ではBRGグループが頼りになっているのか。

(答) 100%頼りになるかというところではあるが、我々もどんどんノウハウを貯めてきているので、その辺はオーナーとも協力の中で、必要な申請というのをどんどんしているところである。

(問) 資本規制はあるのか。

(答) 出店に対しての規制がかかってしまうので、そういう意味では資本規制というよりも、どちらかというところ、実際オープンすることに対しての規制をどんどんかけられているような状況である。



店内視察の様子





○あとがきに代えて

令和5年12月定例県議会 本会議における報告（抜すい）

報告日 令和5年11月22日（水）

報告者 団長 武田 正光

私たち調査団一行は、去る11月15日から19日の5日間にわたり、台湾及びベトナム社会主義共和国を訪問いたしました。

今回の調査の主な目的は、県産農林水産物の輸出促進、外国人介護人材確保の取組の検証、外国人観光客の誘客に関する調査等を実施し、もって本県の経済活性化、福祉分野の人材の確保、魅力発信の推進など、今後の県政の発展に資することです。

調査では、それぞれの調査先において、関係者の方々から丁寧な説明をいただき、また、活発な意見交換を行うことができ、大変有意義な調査となったことに、関係者の皆さまに深く感謝を申し上げます。

調査の詳細につきましては、後日、千葉県議会ホームページにより御報告いたしますが、本日は、その概要について申し上げます。

1日目の15日は、議会運営委員会終了後、成田空港に向かい、台湾の桃園空港へ出発いたしました。

2日目の16日は、まず、台北マリオットホテルを会場とした、県主催の日本産食品輸入大手バイヤーとの会談、試食交流会及び農林水産物・食品輸出商談会に出席し、県産農林水産物・食品の輸出促進に関する調査を実施しました。

また、リージェント台北ホテルを会場とした、県主催の観光商談会に出席し、外国人観光客の誘客に関する調査を実施しました。

それぞれの商談会等では、多くの現地の食品バイヤーや旅行会社が参加し、県内事業者と大変活発な交流と商談が行われました。

特に、日本産食品輸入大手バイヤーとの会談、試食交流会及び観光商談会においては、行政調査団団長として私も挨拶の機会を得ることができ、県議会として

も、県産農林水産物の輸出促進や本県への誘客を後押しするため、本県の魅力をお伝えしました。

続いて、日本台湾交流協会台北事務所を訪問し、服部崇副代表と面会し、昨今の日台関係や台湾情勢などの説明をいただき、千葉県と台湾の関係について意見交換を行いました。

3日目の17日は、台湾日本関係協会に向かい、県産農林水産物の輸出において未だ残る規制措置の撤廃に向けて、熊谷知事、林・県農業協同組合中央会会長、高梨・県漁業協同組合連合会専務理事、細田・県水産加工業協同組合連合会会長と共に、私たち調査団も蘇嘉全会長に対し、要請活動を行いました。

その後、台湾を後にして、ベトナム ハノイのノイバイ空港に向かいました。

4日目の18日は、ハノイ市で、本県の介護人材確保のための千葉県留学生受入プログラムに参加している、J I S人材開発株式会社が運営する日本語学校を訪問しました。

本県は外国人介護人材を確保するため、平成31年3月にベトナムと覚書を締結し、現地日本語学校が、介護分野での就業を目指す留学生を支援する千葉県留学生受入プログラムに参加していることから、その実施状況を把握するため、調査を行いました。

実際に、学校現場を見ることで、取組状況を肌で感じることができ、また、千葉県の印象や介護職への就業について、学生と直に意見交換を行うことができ、大変 意義深いものでありました。

続いて、「在ベトナム日本国大使館」を訪問し、松木 輔 総務参事官から、ベトナムの情勢及び千葉県との関係などについて説明を受け、意見交換を行いました。

その後、最後の調査として、ベトナムにおいて日本産農水産物や食品などを取り扱っている、現地スーパーのイオンモール ロンビエン及びフジマートを視察し、現地での日本産食品等の取扱状況などを調査いたしました。

その夜、ハノイを出発し、19日の朝、成田空港に到着し、今回の行政調査を終了いたしました。

以上、調査の概要につきまして御報告いたしましたが、私たち調査団は今回の調査を通じて訪問先の団体をはじめ多くの関係者の方々と交流し、多くのことを学ぶことができました。

この調査の成果を踏まえ、今後の県政運営の推進のため、なお一層の努力をして参ります。

結びに、今回の調査に当たり、県議会及び知事をはじめとする関係者の皆さまから賜りました御厚情、御支援に対し、心からお礼を申し上げまして、私からの御報告とさせていただきます。ありがとうございました。